

Title	<論文>日本橋久松町商業史覚書：街並み変容小史
Sub Title	Historical Study of Commerce of Hisamatsu-cho in Nihonbashi
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	2004
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.46, No.6 (2004. 02) ,p.73-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20040200-00498919

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本橋久松町商業史覚書

—街並み変容小史—

白 石 孝

〈要 約〉

本稿は日本橋の浜町川入堀以東にあった久松町の明治、大正期の街並みの変遷史である。この町は北・中央・南の3つの区域をもつが、更にその特徴から5つのブロックに分けて考察する。特にその中央部の官有地における久松小学校と久松警察署の設置は、この浜町川入堀以東の第1大区第13小区の中で、この久松町が特異な存在として形成されたものとして注目する。更に南部においては、明治座建設までの経緯をたどり、大正期に至る繁栄の歴史の中で、隣接の鰐谷町3丁目（当時の町名）、浜町2丁目の街並みとのかかわりを指摘し、芝居茶屋廃止後の街並みの変貌に触れる。北部について、明治の初年頃はまだ武家屋敷地の色合いが濃く、明治20年代に至り、急速に商業化していくことを考え、なかでも、織物問屋が次第に増え、大正の黄金期には、人形町通り界隈特に富沢町商業圏に包摂されていく実態を考察する。更に、関東大震災の後、本来の人形町通り界隈の織物問屋が打撃を受けて減少したのに対し、久松町の問屋は激しく入れ替わりをみせつつも増え、ここに新興織物問屋街が根をおろした感すらする。それはもちろん、北部の本稿でA・Bブロックと名づけたあたりであったが、大正15年頃をみると、明治期では官有地として学校、警察のできたEブロックにも商業地が発展しだし、下町商業圏、殊に周辺の町との融合がすすみ、明治期の久松町の特徴が大きく変貌をとげてゆく。本稿は町の姿の変遷を許せる範囲の資料をもとに描き出そうと試みたものである。

〈キーワード〉

武家屋敷地、商業の自律的集積、東京府志料、村松町、官有地、遷屯所、久松小学校、久松警察署、東京商人録、三人兄弟芝居、喜昇座、久松座、島藤、明治座、芝居茶屋、売上税、観劇案内所、よし町商業圏、浜町1丁目、浜町2丁目、橋町、維新不況、織物問屋街化、織物市場の崩落、近江出身、関東大震災、問屋が問屋を生む、分割市場、下町生活圏

はしがき

日本橋は歴史的に異なったタイプの町の集合体といってよい。その商業史からみた町の特徴については、本誌にこれまでたびたび「覚書」の形で記してきたし、これを集約して、昨秋には『日

本橋街並み繁昌史』を刊行した。本稿で取りあげる久松町についても、江戸—明治にわたる街並みの形成の特徴を本誌の43—2で記したことがある。¹⁾しかし、それは他の日本橋の多くの町々のように、江戸時代から町として発展し、各種の商業が町内に自律的に集積した史的過程とは異なり、武家屋敷地から明治になって初めて商業地となるタイプの町の1つであったこと、それでいて、同じタイプの隣接の村松町とは、そこに形成された街並みにかなりの違いがみられるという史的特徴などを中心にするものであった。そこで、本稿では、今一度改めてこの久松町自体の街並みに焦点をあて、時代も明治・大正期を通じ、その商業史的にみた町の特徴を描き、殊に関東大震災前後の街の変貌を明らかにしておきたいと思う。

1 久松町の形成と史的特徴

この久松町は、明治になってそれまでの武家屋敷地を包摂して、約1万6千坪にのぼる大きな町となったところで、もともとは、ほんの小さな町屋にしかすぎなかった。

この核になったもともとの久松町の起立については、すでに前稿の覚書で記したが、実は定かではない。『中央区史』などでは「久松町はもとは村松町の内にあったのを、天和3年に分けて一町とした」とあり、『江戸・町づくり稿』でも同様に、あまり小さな町なので大絵図には記されなかっただけで、やはり天和年間に独立したものという。しかし、筆者も指摘したことがあるように、²⁾村松町自体の起立は天和の後の貞享元年であるから、どうも時代の辻褄はあわない。やはり『東京府志料』のように「此地ハモト村松町ノ分地ナレトモ其年代詳ナラス」とみなされるのではなかろうか。³⁾

もっとも、これも前稿で指摘したが、この古くからの小さな久松町も、栄橋の通りの南側は延宝年間に早くも御破損手代屋敷が町屋となり、元禄期には御材木蔵同心の拝領町屋敷となって、材木手代の名義で町人に貸与されていたところであった。⁴⁾また、この通りの北側、村松町に面した辺りは、それこそ天和の頃に本多豊前守屋敷跡の町家であった。⁵⁾そして、それら以外の町の周辺は全て武家屋敷地であった。⁶⁾

この武家屋敷地については、これもすでに記したが、隣接の村松町とは大きな違いがあったといえる。村松町の方は中層の互いにあまり格差のない幕臣達の屋敷であったが、久松町となる地域の

1) 白石孝「日本橋村松町・久松町商業史覚書」(『三田商学研究』43—2)

2) 中央区役所編『中央区史』(上) p.153

3) 岸井良衛『江戸・町づくり稿』p.224

4) 東京都『東京府志料』p.248

5) 内閣文庫所蔵史籍叢刊『諸向地面取調書』(三) p.946, これについては白石孝前掲「覚書」pp.4-5

6) 前掲『中央区史』(上) p.154, 前掲「日本橋村松町・久松町商業史覚書」図2の江戸時代の久松町略図

図1 安政6年の久松町



それは、文久期にみるように、下は20俵2人扶持の御家人から、上は信濃小諸の1万5千石の牧野遠江守や越前2万3千石の小笠原左衛門佐のような大名の武家屋敷から成っていた。⁷⁾幕末に度々屋敷替えがあったが、安永6年の頃の屋敷をみると図1のようである。これは、久松町の街並みを特徴づける1つの大きな歴史的背景といってよかろう。事実、明治4年、武家地と町地との区別が廃止され、当時の勝山邸、稲葉邸、小笠原邸のような元大名屋敷地を包摂して大きな1万6千坪の町となった久松町は、中央部に広い官有地が設定されたからである。そして、このうちで旧小笠原邸のところは学校地に、また小川橋からの道の北面の一画には遷卒の屯所が設置されたのであった。これは同年に東京市を6大区に分ち、更に区毎に小区を置くことになって、第1大区第13小区となつた久松町が、同区に属する浜町川入堀以東の通塩町、横山町、吉川町、薬研堀町、元柳町、新柳町、米沢町、村松町、若松町、橋町、矢之倉町、浜町、菖蒲町の行政的中心地という性格を持たせられた結果でもある。

明治6年につくられた久松小学校をみても、上記の町々の有志者が協議し寄付金を募ったとされるが、この計画には、横山町1丁目のべっ甲問屋木原伝兵衛、小間物問屋天野源七、橋町1丁目の木綿問屋中村磯八、同2丁目の呉服太物問屋大塚宗七、村松町の塗物問屋磯谷仁兵衛などが加わり、また翌7年の増築には矢之倉町の戸田光則、浜町1丁目の伊達宗徳、同2丁目の牧野康民といった元大名家を中心とした有志の寄付がよせられたもので、まさにこの地区の総力をあげての開校で

7) 白石孝前掲「覚書」の表1-6参照。

表1 第1大区第13小区の町別人口・戸数(明治6年)

町名	人口(人)	戸数(戸)	町名	人口(人)	戸数(戸)
通塩町	341	81	橘町2丁目	318	91
横山町1丁目	417	93	" 3丁目	515	134
" 2丁目	504	118	" 4丁目	414	96
" 3丁目	456	108	村松町	682	162
米沢町1丁目	752	175	若松町	453	133
" 2丁目	302	66	矢之倉町	77	40
" 3丁目	304	76	久松町	473	134
吉川町	256	66	浜町1丁目	464	54
薬研堀町	623	145	2丁目	205	88
元柳町	1,220	327	3丁目	85	28
新柳町	29	12	菖蒲町	100	25
橘町1丁目	290	60	合計	9,280	2,312

『東京府志料』より作成。

あったといえる。明治10年には児童数の増加により薬研堀町16番地にこの分校が建設され、これらの町々の児童を教育するただ1つの小学校でもあった。明治6年の頃では、日本橋区内での小学校は、まだ阪本小学校、常盤小学校、宝田小学校とこの久松小学校の4校のみで、続いて明治8年に城東小学校、9年に有馬小学校、10年に十思小学校、15年に馬喰町4丁目に千代田小学校が開校される。これをみても、明治初年の頃は、この久松小学校が浜町川入堀以東やその周辺(人形町通り界隈)の広い地域の教育を担っていたかがうかがえよう。もちろん、まだその頃は、人口は、これらの地域で多くはなかった。表1は『東京府志料』による明治6年頃のこの地区の各町の人口と戸数で、23ヶ町で人口は合計9,280人、戸数も2,312戸にしかすぎなかったからである。この時期、久松小学校は生徒70余名で開校し、明治15年、本校は男女合せて190人、薬研堀の分校は172人、合計362人であったと記録されている。⁸⁾これについては次稿にでも加筆したいと思う。

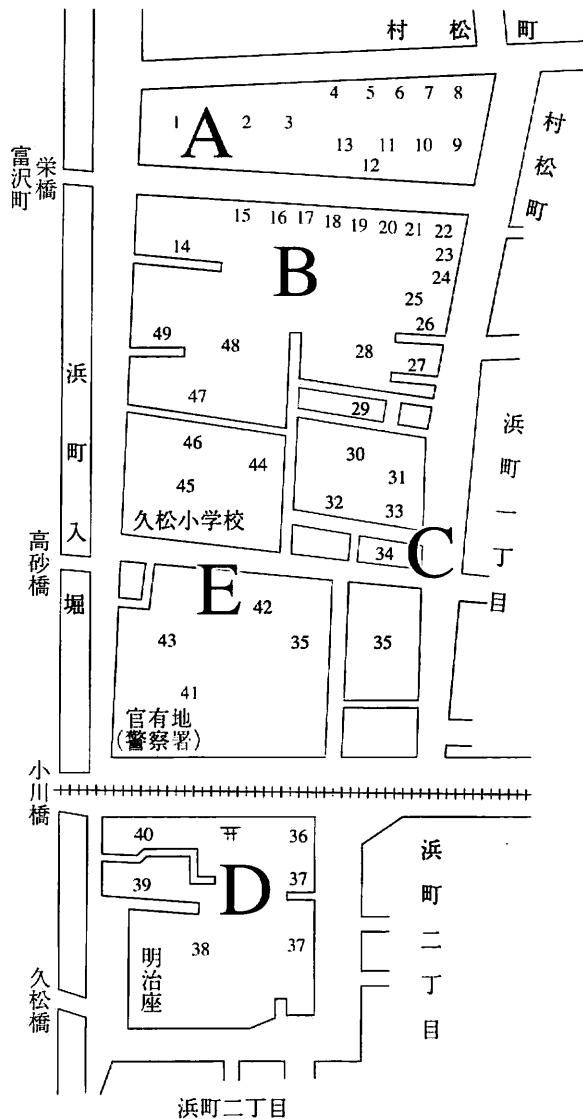
またこの学校地の南は、前述のように、遷卒の屯所が置かれていた官有地であった。これは、明治7年に警視庁が創設されるにともなって、各小区に置かれることになった遷卒(改称巡査)屯所である。当初はこの巡査屯所は浅草見附や蟻殻町にもあったが、久松町に併合される。そして、翌8年には両国広小路にあった12、13、14小区を管轄する「第5署」がこの久松町に移され、小川橋からの通りに面し「久松警察署」がつくられるのであった。⁹⁾

こうしてみると、久松町中央部は、この辺り一帯の行政上の中心的機能を担うところとして形づくられていったといえる。

8) 当時の小学校設立については『日本橋区史』(3)、東京都中央区教育委員会『中央区教育百年のあゆみ』、久松小学校については同校校友会『久松百三十年史』。

9) 久松警察協力4団体創立50周年記念『ひさまつ』久松警察署の生いたち。p.111

図2 久松町略図（地番は明治～大正期）



それでは明治に町になった久松町の居住者にどんな特徴がみられるであろうか。明治9年頃はまだ元武家や医師、儒者などの屋敷がかなり残っていたが、なかでもこの町には多くの医師が居住していたことがうかがえる。明治13年の『東京商人録』によると、そこには、和田昌純、唐沢養民、榎本宗碩、今井玄道、吉川厚、林千尋、笠原玄道、土生玄昌、鈴木厚、赤松玄陽など10名の医師の名があるからである。

しかし、この町の明治の姿を大きく特徴づけるものといえば、中央部の外に、これと通りを隔てた浜町2丁目寄りの南部の芝居劇場とこれを囲む芝居茶屋ではなかつたろうか。図2の町の略図に

におけるDブロックである（現在は浜町2丁目に編入）。

ここに明治6年、早くも両国三芝居の1つ「三人兄弟芝居」による喜昇座ができた。ここは「明治6年沾券図」によると、旧館山藩主備後守稻葉正善の土地であるが、実はこの喜昇座の地所については、様々な説が流布されていて、以前は下総の堀田家の屋敷があったという。しかし、その根拠は詳らかではない。¹⁰⁾もっともこの喜昇座はまだ造作も粗末で両国時代の小芝居の延長程度であつたらしい。それでもここに芝居小屋ができたことは、浜町川入堀の西側の入形町通り界隈に、江戸時代200有余年の長きにわたって芝居町があったという土地柄によるものといえる。明治12年、それまでの維新不況に続く商況不振が通貨インフレによる商業殷盛に変るに及んで、大改築され、当時としては新富座・中村座・市村座に次ぐ大劇場「久松座」に生まれ変わる。しかし、翌13年、日本橋橘町4丁目からの出火により、わずか半年にして類焼、一時、仮小屋を東側の浜町1丁目の板垣退助邸跡地に造ったが、世は通貨整理による不況で、3年余の年月を経て、元の地、久松町37番地の焼跡に改めて「千歳座」が建築されるに至る。これは、この時代の日本橋に創業した新興建築業者「島藤」によるもので、「出し桁造り」土蔵3階建て和洋折衷の新式の劇場建築であった。¹¹⁾しかし、これも明治23年に全焼の憂目にあい、以後3年、金融恐慌・商況不振もあって、興業に出資するものなく、焼けたまま放置されてしまう。これが「明治座」として再建されたのは明治26年のことであった。¹²⁾歌舞伎座に次ぐ大劇場といわれ、ここに、明治30年代からの芝居興行の飛躍的発展が始まる。

これを象徴し、この地域の独特の街並みを示すものとなったのが、この明治座界隈の芝居茶屋の出現である。表2は、久松町のこの辺りと、すぐ南隣の町、浜町2丁目1番地におけるこうした芝居茶屋である。もちろん、浜町2丁目の芝居茶屋橋本などは喜昇座時代からの店といわれるが、明治30年代には、このようにその数は11軒にものぼる。そして注目すべきは、この表にあるように、

表2 明治座をめぐる芝居茶屋（明治33年）

久松町			浜町2丁目		
地番	屋号	売上税 円	地番	屋号	売上税 円
37	中村家	29,320	1	日野屋	27,000
38	和泉屋	25,000	1	橋本	19,400
39	山茂登	26,000	1	さぬき屋	35,200
39	尾張屋	28,600	1	花家	34,200
39	武藏屋	25,000	1	吉萬	24,000
			1	猿屋	23,000

明治33年版『日本商工営業録』より作成。

10) 嶩田吾郎『続浜町史』p.98、木村錦花『明治座物語』p.7、秋庭太郎『東京明治』

11) 『島藤百年史』p.32

12) 秋庭太郎前掲書 p.38

売上税からみた営業規模で、久松町の当時の主な全商店49店中（明治33年）、このような25,000円以上の売上税を納めているものは、わずか18店であったから、この種の芝居茶屋の盛業は推して知るべしといえる。しかも、この久松町の浜町川入堀の西隣の町々には、料理屋、芸者屋、待合が入り乱れている華やかな花柳界「よし町」があり、まさに明治座のあった久松町のDブロックは、学校や警察署のあった中央部のEブロックとは全く様相を異にした賑やかな歓楽街となっていたのである。

もっとも、この地区の芝居興行の全盛期をむかえた大正期には、それまで多くの芝居劇場が依存していた「芝居茶屋」が全廃されるに及んで、再びこの街並みは大きく変貌を遂げるのであった。久松町では、芝居茶屋だった中村家と和泉屋が「観劇案内所」という看板をかけた他は、全て姿を消し、様々な商店のある町になり¹⁴⁾、また浜町2丁目の1番地には実に32の待合が生れるのであつた。¹⁵⁾

こうしてみると、明治座のあるDブロックは、地形の上で、久松町には違いないが、浜町の中に突出し、浜町川入堀を境とするものの蠣殻町3丁目（明治一大正期町名）に接したよし町商業圏の一画をなしていたといえるのではあるまいか。

ここで、更に眼をこの町の北部、図2のA・Bブロックに転ずる。ここは、すでに述べたように、明治の久松町形成の核になった古い町屋と御家人たちが主に住んでいたところで、中央部の官有地とは異なって、商業地として発展していったブロックである。そして、このA・Bブロックの通りに面した箇所は、この久松町の主要な商業地となっていく。殊に、Aブロックの北面は橋町1丁目と村松町に接し、この通りは屈折しつつも薬研堀・矢之倉町とを結び、大川端に達するものであつただけに、この辺りの住民の生活関連の商店が多くなっていくところであった。また、同様の街並みはBブロックの東側とCブロックのような村松町・浜町1丁目に面した通りであった。ただこれらの地域にいつ頃からどんな店ができるかは詳かではない。すでに述べたように、明治初年、維持不況は日本橋の店々を襲ったが、特に武家地周辺の店々は次々と閉店を余儀なくされ、商いはさびれていった。¹⁶⁾事実、明治13年の『東京商人録』をみても、そこに掲載された70種類以上の業種のどこにも久松町の店の名はない。また表3のような明治9年の久松町の土地所有者をみても、居住者に商人の名はないし、町外からの商人のここへの土地投資はわずか数人にも達しない。しかし、明治20年代に入ると急速にこのA・B・Cのブロックに様々な商店がみられるようになる。殊に表4のように古着商が5軒、呉服・木綿織物問屋が2軒、染物業が3軒出店され、次第にこの町に織物問屋関係の店が増えてゆくのであった。

13) 明治33年『日本商工営業録』による。

14) 大正7年『日本各種営業者姓名録』による。

15) 白石孝「日本橋浜町2・3丁目商業史覚書」（『三田商学研究』43-5）

16) 白石孝『江戸・明治・大正史日本橋界隈の問屋と街』p.66

表3 明治9年時の久松町土地所有者

地番	氏名	住所備考	地番	氏名	住所備考	地番	氏名	住所備考
1	太田とみ	深川	15	榎本宗碩	居 医	30	清須美以忠	居
2	大鐘善蔵	室町	16イ	高橋太七	平右衛門町	31	小笠原長育	居
3	山上弥八	居 口	17	三浦金吉郎	当町17	32	平林通恪	居
4	三浦金吉郎	当町17	18	池田江村	当町19	33イ	甲谷親男	—
5	"	"	19	"	居	34	小出重孝	芝田町
6	"	"	20	有馬宗吉	蠣殻町7	35	竹井惣兵衛	茅町
7	和田昌純	居 医	21	"	"	36	牧野貞寧	本所
8	"	"	22	"	"	37	赤松玄民	居 医
9	林久米	千住	23	平井元亨	居	38イ	官有地屯所	
10	磯谷仁兵衛	村松町	24	曾我克輔	居	"	" 学校地	
11甲	"	"	25	林次郎八	居 医	39	神田信三郎	当町5
乙	河村永淳	居 医	26	佐藤梶	居 儒者	40	土生玄昌	居 医
12	中島押齋	居	27	森田勝五郎	居	41イ	光田とう	居
13	村田惣太郎	村松町	28	渡辺牧太	居	口	福島正賀	居
14イ	小野平吉	居	29	清須美以忠	居			
口	中村喜兵衛	居						

明治9年9月21日『地主名鑑』より作成。

表4 明治20年代久松町商店（地区別）

ブロック 地番	業種	店名	ブロック 地番	業種	店名
A 1	古着商	越前屋川口興兵衛	B 17	古着	岩井久蔵
A 2	染物・手拭	中村屋閑口仲吉	B 17	木綿問屋	藤村清助
A 2	古着商	絹屋永田幸吉	B 21	穴藏大工	八木藤吉
A 3	カツラ細工	柳原金吉	B 29	染物	金子屋新井金次郎
A 5	木綿問屋	山本嘉七	C 30	古着	川村角八
B 14	呉服織物問屋	下村忠兵衛	C 35	金物	安達平吉
B 14	打綿問屋	菊池浜之助	E 46	古着	伊勢屋西山幸吉
B 14	染物	小島清兵衛			
B 15	化粧品	益田第一堂			

『東京諸営業覚録』明治27年より作成。

それは明治30年代における富沢町界隈の織物問屋街化と軌を一にするものであり、浜町川入堀を越えた同じ商業圏へと変貌する。

2 久松町の街の同化と変容——明治から大正に——

実際、明治31年には久松町の織物問屋は13店、更に2年後の33年には、表5のように15店に増えていった。もちろん、この大部分はAとBブロックのそれもごく一部の箇所に集中しており、また

表5 明治33年久松町の織物問屋

NO.	ブロック	地番	店名	業種	売上税(円)
1	A	1	根本栄次郎	浴衣地金巾裏地	16,480
②	A	1	上野屋栗田庄太郎	洋織物	58,200
③	A	2	島崎富八(出張店)	木綿	32,540
④	A	5	和泉屋山本嘉七	太物	39,000
5	A	11	山口友次郎	"	10,600
⑥	B	14	よしや内田定助	"	19,000
⑦	B	14	小島屋遠藤平吉	木綿織物	19,400
⑧	B	14	下村忠兵衛支店	呉服太物中形	140,700
⑨	B	15	さんごう山郷豊次郎	和洋毛織	18,000
⑩	B	17	伊勢屋中村少三郎	羅紗毛織子	21,000
⑪	B	17	藤村清助	双子織	25,760
⑫	B	27	宮田武兵衛	呉服太物	16,760
⑬	B	29	柴田半六	洋傘地織物	12,800
14	C	34	川村幸蔵	太物	27,200
15	B	49	川口安次郎	洋織物	14,528

明治33年日本商工営業録より作成。○印は明治31年と同じ。ブロックABC本文参照。

1・2を除いては殆どが小規模な店であった。それは、この時期に同じように織物問屋が増えた北隣の浜町川入堀に沿う橋町1丁目と比較すると明らかである。表6は同じ明治33年における橋町1丁目の織物問屋である。そこでは、No.2の呉服太物の大黒屋石井清兵衛店、No.9の呉服木綿の中屋安田源蔵店、No.12の木綿の中磯中村磯八店のような大店や、その外、売上税が5万円以上のものが5店もあるのに対して、表5の久松町では、これに比敵するものというと、わずかにNo.2の洋織物の上野屋栗田庄太郎店とNo.8の呉服太物の下村忠兵衛店しかない。しかも、この売上税14万円の大店、下村忠兵衛店というのは京都の呉服・西陣織物の東京支店である。

しかし、この久松町に織物問屋が著しく増えてゆくのは、やはり大正期になってからである。それは明治30年代からの織物市場の拡大を背景とするものであった。これについてはすでに筆者が本誌で「織物問屋群生の史的背景と特徴」の稿でも述べたが、¹⁷⁾ 大正8年の織物市場の黄金時代にむけて、人形町通り界隈21ヶ町の織物問屋の数は、明治33年の194軒から大正7年には224軒にも達し、更に周辺の町へと拡大していくに至る。この時期、久松町もまた32店にまで増加、大正10年には表7のように実に39店にも達する。¹⁸⁾

実はこの39店というのは、人形町通り界隈の織物問屋街と比較しても突出した数であった。たと

17) 白石孝「織物問屋群生の史的背景と特徴——明治・大正期の人形町通り界隈」(『三田商学研究』46-2)

18) 日本商工通信社蔵版『東京職業別電話名簿』より織物商、呉服太物商、毛洋物商などから抽出。

表6 明治33年橋町1丁目織物問屋

No.	地番	店名	業種	売上税(円)
1	4	吉野屋 斎藤太三郎	木綿金巾	39,080
2	5	大黒屋 石井清兵衛	呉服太物	187,400
3	5	大阪屋 大澤忠七	"	42,560
4	5	布袋屋 成澤善兵衛	木綿金巾	57,450
5	5	布屋 上田藤三郎	太物	24,000
6	5	一小松原龍藏	木綿	10,050
7	5	結城産織物合資秋場三松	結城織物	19,600
8	6	近江屋 門田嘉右衛門	木綿金巾	65,800
9	6	中屋 安田源藏	呉服木綿	291,000
10	7	上塙屋 栗田民藏	呉服太物	35,400
11	8	中治 中村治平	"	76,200
12	9	中磯 中村磯八	木綿	177,000
13	9	大黒屋 梨木民治郎	洋織物	66,700
14	10	市田屋 布施栄三郎	木綿金巾	60,620

出典 表5と同じ。

えば、その頃の田所町は24店、長谷川町は36店、富沢町は34店であったからである。それは、明治30年代から起った織物問屋の群生が、この最盛期をむかえ、もはやこれらの町々には新規開業の余地が少くなり、しかも相対的に地価の安い周辺の町々へと進出していった結果といえる。事実、織物問屋の数では、橋町もまた37店（内1丁目22店）の多さに達しているからである。

大正10年のこの久松町の織物問屋の分布をみると、やはり栄橋からの通りに面したA・Bブロックの1番地から22番地の箇所に多く、また更に、従来の浜町1丁目に面するCブロックに加え、高砂橋から入った官有地の北面のEブロック35、42番地にも数軒の店をみるに至る。

しかし、この大正10年と表5の明治33年の問屋をみると、その大半が入れ替っていて、明治33年の15店のうち、残っているのは、No.1の根本栄次郎店、No.2の上野屋栗田庄太郎店、No.14の和泉屋山本嘉七店、No.19の下村忠兵衛東京支店のわずか4店にしかすぎない。もっとも、こうした入れ替わりは、明治から大正にかけての織物問屋業界の激しい変動によるもので、なにも久松町に限ったことではない。殊に大正9年～10年の織物市況の崩落が、この変動に拍車をかけたことはいうまでもないが、この久松町に顕著であったのは、すでに述べたように、この町の問屋の規模が比較的に小さく、経営基盤が軟弱なものであったことによるのではなかっただろうか。もちろん、なかには、大正7年にあった綿ネルの平松藤次郎店が富沢町に、木綿金巾の斎藤甚八店が橋町1丁目に移転するなど、他の町に移ったものもある。

この大正10年という明治以来の織物市場における1つの節目の時期に、この町にあった店について、筆者の知る限りのものを記すと次の如くである。

表7のNo.1の根本栄次郎店は、明治期における織物市場に新しく登場した木綿金巾を扱う浴衣

表7 大正10年久松町の織物問屋

No.	プロ ック	地番	店名	業種	No.	プロ ック	地番	店名	業種	No.	プロ ック	地番	店名	業種
1	A	1	根本栄次郎	木綿金巾	16	A	6	種村源之介	木綿金巾	32	C	35	藤沼喜三郎	太物
			上野屋		17	A	11	中野合名	和洋織物	33	C	35	宮川幸三郎	呉服太物
2	A	1	栗田庄太郎	洋織物	18	A	13	鈴木秀次郎	太物				榮屋	
3	A	1	森林商店支店	絹綿織物	19	B	14	下村忠兵衛(支店)	呉服太物	34	C	35	安藤正治	綿織物
			松藤		20	B	14	小林泰助	綿布				丸正東京出張所	
4	A	1	奥田藤八	木綿				西彦		35	D	40	前田直次郎	毛織物
5	A	1	西村武兵衛	綿布	21	B	15	西彦兵衛	木綿金巾	36	D	40	梅谷伊之助	和洋織物
6	A	1	加藤孝輔	洋反物	22	B	17	宝田伊三郎	木綿				森三号	
7	A	2	大鳴金次郎	洋織物	23	B	17	安田周吾	羅沙毛糸	37	E	42	田中三雄	輸出織物
8	A	2	斎藤兼吉	木綿	24	B	18	松本儀三郎	太物金巾				近江屋	
9	A	2	中川與惣太郎	京呉服	25	B	18	野口保出張店	綿織物	38	E	42	市橋治三郎	京呉服
10	A	3	市田繁蔵	呉服				加根樹		39	B	49	稻村福太郎	中形金巾
11	A	3	野村市太郎	綿布	26	B	19	西彦治郎	綿織物					
12	A	3	瀧沢新吉	和洋織物	27	B	20	石崎常吉	太物					
13	A	4	松本兵四郎	綿布染織	28	B	22	梶本文藏	綿ネル					
			和泉屋		29	B	29	小川文平	太物					
14	A	5	山本嘉七	太物	30	B	29	須関重平	木綿					
15	A	6	野口弥市郎	呉服綿布	31	C	30	佐野芳祐	小倉服地					

大正10年「東京職業別電話名簿」より作成。

地・金巾裏地などの店で、小規模ながら以後長くこの地で営業を続けていた店の1つであった。

No.3の森林商店は古く安政年間に愛知一宮で開業し、そこを本店とする絹綿織物問屋で、尾州・遠州近在のものを始め、青梅、甲斐絹、越後ものを扱い、久松町のこの店はその東京支店であった。¹⁹⁾

No.4の「松藤」奥田商店の当主奥田藤八は伊勢の旧家で、江戸に出て開業したのが元禄という老舗、大正期には木綿問屋とあるが、昭和期に橋町に移転した絹綿布問屋である。No.9の中川與惣太郎店は近江出身で静岡で奉公の後、明治44年上京開業した京呉服の店で、後に富沢町に移転する。

No.10の市田繁蔵店はこれも近江出身で呉服の持下り商いから明治42年に小伝馬町で開業した後、久松町に移転した呉服問屋で京呉服関東織物を扱う店であった。No.13の松本兵四郎店も近江出身で通油町の風呂敷問屋中村店に奉公し、大正2年に富沢町で開業、大正3年にここ久松町に移転した店である。No.17の和洋織物問屋中野合名の当主は福井出身で、弥生町の洋織物問屋島利に奉公して独立、島利の地盤を継承する店であった。No.19の下村忠兵衛店はすでに前述もしたが、その初代は京都出身で古着行商から発展、49銀行創立のほか京羽商会を設立して海外貿易を行い、明治22年に東京支店、明治36年に大阪支店を開く木綿呉服問屋の大店である。No.21の西彦兵衛店の初

19) 大東亜織維研究会編『日本染織工業発達史』の主要織物問屋表 p.156 による。

代は近江出身で行商から明治5年に橋町で木綿金巾商を開業、更に富沢町に移り、明治30年に久松町に移ったという。しかし、二代目の時、各種機械製作販売を営むに至る。No.20の石崎常吉店は千葉県鳴川の出身で宮田商店に奉公していたが、主家廃業と共に、この久松町に大正2年独立開業、中形裏地の自家加工を営む。

こうしてみると、やはり近江出身が多い。上記以外にも、No.23の安田周吾店、No.24の松本儀三郎店、No.38の市橋治三郎店も近江の出である。これは大正15年になると更に顕著となる。

しかし、久松町はもちろんのこと、日本橋の織物問屋にとっての衝撃は、大正12年の関東大震災であったことはいうまでもない。それも、前述のように大正10年の大戦後の反動不況による商品相場の暴落の打撃の傷が癒えぬうちの災害であった。その結果、日本橋の織物問屋の数は大幅に減ずる。

表8は大正10年と大正15年の東京市と日本橋区内の織物問屋数である。まずこれをみても、織物問屋がいかに日本橋区内に多いかがわかる。それは東京市全体の84%にもあたるからである。この日本橋区内でも、震災後、その数は499店から344店に約30%も減少した。更に注目すべきは、明治30年代より群生化し織物問屋街となった人形町通り、大門通り及び浜町川入堀以東の3つの町々の変化であろう。この表8ではこれらを日本橋区内該当地域としたが、その合計数は356店から260店、即ち約28%の減少であるが、更に表9でみると、通旅籠町や岩代町を除き、全ての町で減少をみ、特に堀留町2・3丁目では19店から8店にまでに、この地域では比較的に織物問屋の多かった田所町は24店から16店に、新材木町は21店から10店に半減し、長谷川町は36店あったものが21店に、富沢町でも34店から24店にまで、それぞれ大幅に減少している。この減少は、すでに述べたように、織物問屋の群生期に巻き込まれるように増えていった浜町川入堀以東の橋町や村松町にもみられるが、しかし、本稿の対象の久松町では震災前とその数は、まさに例外的に変わっていない。そして、むしろ、長谷川町や富沢町といった織物問屋街に対して、数の上ではこれを上回るものであった。

表10は震災後の大正15年における久松町の織物問屋39店である。前掲の表7の大正10年と比べると、No.に○印をつけたものは変らず、約半数ほどが入れ替っている。もっとも、表7のNo.4の奥田藤八店は橋町に、No.5の西村武兵衛店も新和泉町に、No.9の中川與惣太郎店はやはり橋町に、

表8 関東大震災後の織物問屋数

地区	大正10年	大正15年
	(店)	(店)
東京市	591	412
日本橋区	499	344
内 該当地域	356	260

日本商工通信社蔵版「東京職業別電話番号名簿」より作成。該当地区については本文参照。

表9 関東大震災前後の町別織物問屋数

町名	大正10年	大正15年	増減△
通旅籠町	21	23	2
通油町	20	16	△4
堀留町2・3丁目	19	8	△11
田所町	24	16	△8
新大坂町	12	9	△3
元浜町	16	13	△3
新材木町	21	10	△11
長谷川町	36	21	△15
新乗物町	10	7	△3
弥生町	5	4	△1
富沢町	34	24	△10
岩代町	6	7	1
高砂町	12	10	△2
蓑屋町	6	4	△2
堺町	16	10	△6
新和泉町	5	4	△1
浪花町	4	1	△3
小計	267	187	△80
橘町	37	27	△10
村松町	13	8	△5
久松町	39	39	—
小計	89	74	△15

資料 表8と同じ。

No.27の石崎常吉店は富沢町、橘町と転々と移り、この久松町に再び戻ってくるのは昭和10年頃であった。多分これ以外にも移転していったものがあろうが、資料の上で詳らかではない。

こうした織物問屋の激しい入れ替わりは、休業、閉店、移転の一方で、次から次へと開業していくこの業界の特徴にほかならないが、本誌にも前稿で記したように、勤め先から独立しては店を持つ、いわば「問屋が問屋を生む」という独特の世界を示すものといえよう。例えば、表10の大正15年に店のあったNo.9の奥住市太郎店も洋反物問屋「三作」に奉公した後、プローカーになってから店を持ったものであるし、No.35の瀧川忠次郎店も富沢町井上市兵衛店が閉店のため独立し、新乗物町から震災後にここに移ってきたものであった。No.39の辻富蔵店も山清商店に奉公した後に

表10 大正15年久松町織物問屋

No.	A ブ ロ ッ ク / 地 番	店名	業種	No.	E ブ ロ ッ ク / 地 番	店名	業種	No.	F ブ ロ ック / 地 番	店名	業種
①	A1	上野屋	洋織物	⑯	6	野口弥一郎	綿布	29	29	佐藤三郎	和洋織物
		栗田庄太郎	木綿	⑯	6	稻村源之介	木綿金巾	⑩	29	須関重平	木綿
②	1	根本栄次郎	絹綿織物	16	9	藤村清太郎	太物	31	C30	佐野芳和	小倉服地
③	1	森村商店東京支店	綿布	⑰	11	中野合名	和洋織物	32	32	青木隆藏	和洋織物
4	1	藤沢乙生	木綿	⑯	11	秋山孝三郎	綿布織物	33	E35	岸本清太郎	木綿
⑤	2	斎藤兼吉	近江屋	⑲	B14	下村東京支店	絹綿織物	⑩	35	宮川幸三郎	吳服太物
6	2	小杉清七	広巾綿布	⑳	14	小林泰助	綿布	35	D38	瀧川忠次郎	和洋織物
⑦	3	市田繁蔵	吳服	21	14	大成商会	絹綿織物	37	E42	田中三雄森三号	輸出織物
⑧	3	瀧沢新吉	太物	22	15	斎藤伝四郎	綿布	⑩	42	西崎徳太郎	吳服太物
9	3	奥住市太郎	洋反物	⑳	15	伊藤金一	綿織物	⑩		近江屋	
10	4	梅村源三郎	綿布	24	17	西彦商事	京呉服西陣織	39	42	市橋治三郎	京呉服
		和泉屋		⑲	17	古荘東京店	安田周吾		B49	辻富蔵	太物
⑪	5	山本嘉七	太物	⑲	18	松本儀三郎	ラシャ毛糸				
12	5	鈴木秀次郎	〃	27	22	伊藤新商店	太物金巾				
13	6	植木彦吉営業所	木綿	28	29	辻村商店	吳服				
							織物				

資料 表8と同じ。No.の○は大正10年と同じ。

大正9年に独立したもので、この店からまたこの表の後だが久松町10番地に、木綿問屋安居利三店が店を開くし、同様に安居惣七山一商店も木綿人絹裏地の商いを始める。殊に、このような主家からの独立は昭和に入って急速にまた増加をみせる。山口商店から大熊吉松（中形裏地）芳町の川村千代吉店から川原崎増造店（綿布）、津田商店から立入長次郎店（人絹加工）、富沢町の深田京兵衛店より北村英太郎店（京呉服）、同じ富沢町の塚本三蔵店より安田辰蔵店（綿布加工）また薩摩治兵衛店より大岡信三郎店（綿布）など続々と独立開業してこの久松町に店を持つに至り枚挙のいとまもない。これについては、いずれ次稿で詳述したい。

こうしたことは、やはり織物市場が多様であり、ものによっては独特の意匠や名柄で商売ができる分割市場であるため、新規参入が可能な結果にはかならない。

そこで、この織物問屋の明治から大正の激変期にかけての、久松町における地域分布をみてみると、表11のようである。やはり、図2にあるように、Aブロックに著しく増加しているが、めだつのは、明治時代に学校地や警察署関係の官有地を中心としていたEブロックにも、この種の店がみられるようになったことである。そこで最後に、大正期における久松町35、42、43、46のEブロックの商店を表12にまとめておきたいと思う。何故かというと、この地域は久松町が明治になって形成されたとき大名屋敷跡から官有地になったところで、北のA・Bブロックや、浜町1丁目に隣接するCブロック、及び明治産を中心とした商業地区とは、質的にかけ離れた地帯であったからである。これが、大正期前後より急速に商業地となってゆくのがみられ、学校・警察署をとり巻いて下

表11 久松町ブロック別織物問屋店数

ブロック	明治33年 店	大正10年 店	大正15年 店
A	5	18	18
B	9	13	13
C	1	4	2
D	0	2	1
E	0	2	5
計	15	39	39

表5、7、10からの店数、ブロックは図2参照。

表12 久松町Eブロックの商いの業種（大正7年）
(但し織物問屋除く)

35番地

京染、洗張、雑貨、人力車、足袋、履物、小間物、菓子、魚、牛乳、靴、漬物、鶏肉、乾物、染物、料理、理髪、桶、西洋料理、足袋、魚、コルク輸入、かもじ、焼芋、菓子、文房具、金物、西洋小間物、謡曲指南、長唄師匠、よし町二業組合事務所、雑貨、裁縫、型紙、左官、氷、髪結、雑貨、髪結、新聞社、裁縫、傘、医師、踊師匠

42番地

医師、ミシン加工、琴長唄師匠、菓子、雑貨、学校用品、歯科医、洋品、半襟、蚊帳、そばや、小間物、文房具、出版、渋紙、ミシン加工、生花指南、鍼灸

43番地

乾物、紙、理髪、煎餅、型紙、大工、帶仕立、蒲団

46番地

牛乳、紙、印刷、薬、古着、洗張、運送、裁縫、理髪

大正7年『日本各種営業者姓名録』より作成。

町の街並みになっていく姿を示しているからである。殊にこの表の業種をみて、35番地にはよし町二業組合事務所があり、女髪結、音曲の師匠の多くみられるのも、すでに述べたように、この久松町の立地条件の中に、西隣のよし町花柳界の色彩が浸透していた結果といえるであろう。まさに町は時代と共に周囲の街並みに同化し、歴史的に持っていた特性を変容していくものであることを示すものである。それでは、この町は昭和に入りどのような変貌をみせるであろうか。次稿で更に追求していきたいと思う。